

「学歴の壁」を越えて

サウジアラビアから帰国後、しばらくして安藤さんは安定した大企業の道を離れ独立を決意する。きつかけは目に見えない、けれど冷たい。ガラスの天井、を感じたからだ。自治体なども絡んだ大きなプロジェクトにチームの一員として加わっていた安藤さんは、クライアントとの打ち合わせでその仕事ぶりを褒められた。

「この大学を出られたのですか」

「それが、実は出てないんですよ」

その瞬間、雑談のなごやかな空気が一変したように感じた。

「その時は『本当によく頑張ったんですね』という感じで話が終わったんです。でも後日、課長から『次の打ち合わせ、もう来なくていいぞ』と。理由を聞くと『高卒がやるような世界の仕事じゃない』というニュアンスで、先方が伝えてきたというのです。だから担当を変えろと」

その一件がなくとも、昇進や役職に関して「学歴」という名の天井があることは理解していた。

「世の中はちょっとコンピュータが普及し始めた時代。私もコンピュータの専門学校に通いながら、学費を稼ぐために設計図面を描くアルバイトを始めていました。それが月給の2倍、3倍も稼げるのが分かったので、これは自分で事業を立ち上げたい機会だとサラリーマンに区切りをつけました」

26歳で、ワンルームマンションの1室から事業を立ち上げる。これがRitaXの原点となった。

「創業から10年ほどは、厳しい時期も……というより正直、厳しいことのほうが多かったですね。その時期を



工業高校でビリだった人間が、人生のどんな局面に立たされても間違わずに歩んでこれたのは、やはり空手と出会い、道場訓に出会ったおかげだと思うのです。道場訓の中の『生涯は修行なのだ』という言葉は、稲盛和夫さんの『心を高め、理念を高め続ける』という考え方にも通じる。その教えが私を律してくれて、今があるのだと実感しています。



①大分県立中津工業高校土木科の卒業記念で担任の先生と。成績は学年ビリだった！②極真会館小嶋道場木更津支部に入門し尊敬する中根先輩(中央)と一緒に(スーツ姿が安藤氏)③1984年、サウジアラビアの海外支局に異動する。砂漠に火力発電所を作るというプロジェクトに加わった④26歳で独立起業するも、信頼するスタッフの離脱などで何度も苦境に陥った⑤2005年、尊敬する稲盛和夫氏と。稲盛氏が若手経営者のために開いた「盛和塾」に参加し、経営哲学と人生哲学を学んだ。稲盛氏の前で空手の演武を披露したこともある。



にも小嶋道場の先輩だった。

入門当初の頻度には至らなかったものの、会社経営のかたわら地道に稽古を続けた安藤さんは、40歳で十人組手を達成して黒帯を取得。さらに50代に入ってから三十人組手を達成して参段を取得した。

「経営では資金繰りが続かない時期もありましたし、『コンプライアンス』の言葉もない時代、顧客から理不尽な支払い拒否にあったこともあります。信頼していた社員が辞めていく時のつらなせなさは、表現する言葉が見つからないほどのです。そんな時に必ず思い返したのが、道場での稽古であり十人組手の経験。ぶっ倒れるかと思うような、あれほどの辛さや苦しみにも耐えられたのだから、今の苦しみもきつと乗り越えられるだろうと。経営も空手と同じで、諦めたら最後。この不撓不屈の精神を教えてくれた空手と極真会館小嶋道場小嶋会長には、心から感謝しています」

道場訓と稲盛哲学が交差する地点

「自分には二人の師がいます」と安藤さんは常々公言している。一人は極真空手の創始者である大山倍達総裁。そしてもう一人は京セラとKDDIの創業者で、JALを再建したことでも知られる、経営の神様、稲盛和夫氏だ。

「お二人の教えは驚くほど共通している」と、私には思えてなりません。稲盛和夫さんは「至誠(しせい)」、つまり「誠を尽くす」という。一方、大山総裁は「真(まこと)を極める」と説く。字は違いますが、どちらも要約すれば「真面目」「一生懸命、日々を誠実に生きることの大切さ。それ

はまさに最澄のいう「隅を照らす」ような生き方で、真を極める生き方こそが最終的に人生の成功者になる」と

両者が説く「真」または「誠」とは、人間としての正しい生き方、姿勢そのものだという安藤さんだけに、自身の経営観もまた、この二人の教えが交差する一点に集約されている。二人の哲学をRitaXの社内制度に具体化したもののひとつが、空手の帯制度を取り入れた賃金資格制度だろう。社員は空手の帯の色と連動した色のストラップをそれぞれ身につけ、その色別にやるべき業務と年俸が明確に規定されている。

「空手の道場には昇級審査という明確な昇級制度がある一方、多くの一般企業では昇級や昇給の規定が曖昧で社員からの不満も出やすいですね。加えて、稲盛さんが説いた『大家族主義』が『実力主義』というフィロソフィ(経営哲学)もヒントになりました。社員はみんな仲良くしていますが、その中でも実力主義でいくと。実際、空手の昇段審査にあたる審査を経て、みんなが認めた者だけが青、黄色、緑、茶色になっていく。社員それぞれが憧れの色を持ち、その色になるために何をすべきかが分かっているの、頑張るモチベーションにも直結しています」

安藤さんがかつて直面した「学歴の壁」は、この会社には存在しない。「実力がなければ昇級はなく、年功序列という考えもありません。評価されるのは学歴ではなく、目の前の仕事に対する姿勢と、ひたむきな努力、そして実力と成果だけです」

BIM技術で世界へ

RitaXの最大の強みは、建設

「工業高校でビリだった人間が、人生のどんな局面に立たされても間違わずに歩んでこれたのは、やはり空手と出会い、道場訓に出会ったおかげだと思つのです。道場訓の中の『生涯は修行なのだ』という言葉は、稲盛和夫さんの『心を高め、理念を高め続ける』という考え方にも通じる。その教えが私を律してくれて、今があるのだと実感しています」

ビジネスのどんな場面でも、逃げず、人を騙すことなく、真正面から誠実に、実直に。その姿勢を貫きながら、安藤さんはビジネスでも、人間としてもさらに学び、高みを目指したいと思っている。

「ビジネスにおいてはTOKYO PRO Marketへの上場を通過点に、東証のメイン市場へのステップアップというビジョンを持っています。その一方で、世の中のために貢献できる人材の育成にも努めています。たとえば私のように協道に逸れたとしても、毎日の小さな積み重ねや、出会う人への感謝の心を持ち続けることで人生は豊かに、幸福になる。若者たちに、自分が空手と経営から学んだこの真理を伝えていけたら」と

上場を契機に変えた「RitaX」の社名は、漢字の「利他」が元になっている。人に尽くし、相手を思いやるという武道と経営の師が説いた共通の哲学を、その社名は過たず体現している。

小学5年生に歯が立たなかった19歳の青年は、40年の歳月を経て、極真参段の黒帯を締め、上場企業の経営者として今日も一歩ずつ、わずかも下がらず前に歩み続けている。真を極める。その生き方がこれから変わることはない。